◉資料紹介

アチックミューゼアム日誌（1）

昭和一〇年九月～一二月

神奈川大学日本常民文化研究所は、澁澤敬三が主宰したかつてのアチックミューゼアム（昭和一七年に日本常民文化研究所と改称、昭和二五年に財団法人化、昭和五七年神奈川大学へ移管、以下「アチック」と略記）以来、八〇年になんなんとする在野の研究所としての歴史を有している。その間に蒐集された多種多様な資史料のうち大きなコレクションは、歴史の経過のなかで、数カ所の資料保存機関に分割所蔵されている現状である。

特に、戦後財団化され、澁澤敬三の実質的な後ろ盾がなくなってからは、常に財政的な危機にさらされ、研究分野や運営の重点がほぼ十年の単位で変わらざるを得なかったことなどから、具体的な研究所運営の様相はなかなかわかりにくかった。

本研究所も財団法人から運営に関する大量の資料を受け継いだが、その引き継ぎ資料のなかにそれまでの研究所の歴史を語る資料がすべて累積されていたわけではなく、資料はその時々に運営の中心に関わっていた個人に分散所蔵

されている場合も多かった。本研究所では、それら個人の所蔵に帰していた研究所関係資料も収集することにつとめている。

今回紹介する日誌もそのような資料の一つである。この日誌は、戦後の漁業制度改革に伴う日本常民文化研究所月島分室の活動の中心人物であった宇野脩平氏の所蔵資料のなかに入っていたものである。宇野脩平氏の活動については網野善彦氏の論考[註]が詳しいので概略にとどめるが、宇野氏は昭和一五年東洋大学を卒業後、直ちに澁澤栄一伝記史料編纂会に入り、土屋喬雄氏の指導を受け、同氏の推薦で昭和一七年から日本常民文化研究所の水産研究室へ勤務する。その後召集、復員後、水産庁外郭団体の水産研究会研究員等を経て、漁業制度資料の蒐集計画をすすめ、財団化された日本常民文化研究所月島分室をリードしていくようになる。このような動きのなかで、いつしか宇野氏の手元にこの「日誌」がわたったものと推測される。

日誌は、縦一四・〇×横二〇・七センチメートル、全一九六葉の無罫のノートに書かれている。ノートは、表紙がレンガ色の厚紙、中身はいわゆるザラ紙で、紙質は良いとは言えず、そのため傷みが激しい。裏表紙に「東京　伊東屋」のラベルがあることから東京銀座の文具店・伊東屋製であることがわかる。表紙には毛筆で「日誌　昭和十年九月一日　　袖山　浜田　高木」と記されている。昭和一〇年九月一日に書き起こされ、昭和一二年まではほぼ毎日書き継がれているが、昭和一三年五月以降、一カ月に一―三項目程度の記載となり、昭和一四年は一月二〇日のみの記載で、日誌は終わっている。

記入者は、当時アチックの出版業務を担っていた高木一夫と、アチックの書生であった浜田国義、袖山富吉である。鉛筆、ペン、あるいは毛筆で、日々の業務――例えば印刷所とのやりとりなど出版業務や図書整理の進行具合など――を中心に記されているが、そのほか所員、同人の来所や宿泊、時々の話題、研究会や歓迎会開催のことなど、その当時のアチックの日常的な様子が、研究活動を下支えしていた視点から記された業務日誌であるといえる。

昭和一〇年は、アチックの基本的な活動が軌道にのり、数多くの出版、調査などが計画、実施されており、それに伴う様々な事務処理が出来していたことが知られる。

今回は紙幅の都合で、昭和一〇年分を翻刻した。また日誌という資料の性格から、略記、メモ的記載が多いため、わかる範囲で註を施した。この註については、手持ちの資料を基に作成したが、不明な点や誤った記載が多々あると思われる。この点については今後も調査をつづけ、また大方のご指摘、ご指導をいただき、随時訂正、加筆していきたいと考えている。多くの情報をお寄せいただきたく、ご協力をお願い申し上げたい。

（筆写・文責　窪田涼子）

註

「戦後の日本常民文化研究所と文書整理」『神奈川大学日本常民文化研究所論集　歴史と民俗』一三（一九九六　平凡社）、『古文書返却の旅』（一九九九　中央公論社）など。

（史料翻刻にあたって留意した点）

1、人名、書名などには可能な限り註を附した。但し現時点で手元にある資料を基にしたため、詳細不明なものも多く、誤記もあるものと思われるが、今後、逐次加筆、訂正していきたい。

2、原本のうえで、抹消されている文字は、〈　〉内に抹消した文字を記した。

例　原本「鬼喜界島」　→　翻刻「喜〈鬼〉界島」

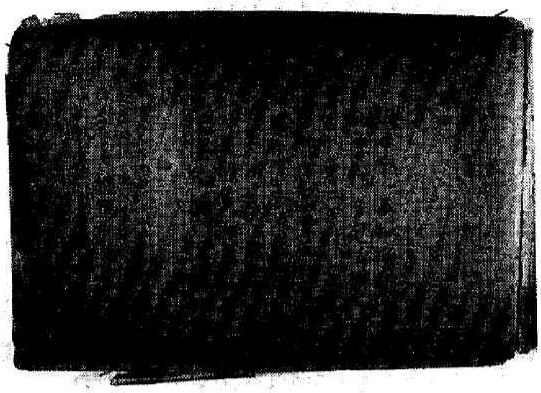
3、例えば「浜田」の様に記したものは文字を四角で囲んでいる場合、「(浜田)」としたものは丸で囲んでいる場合、とした。

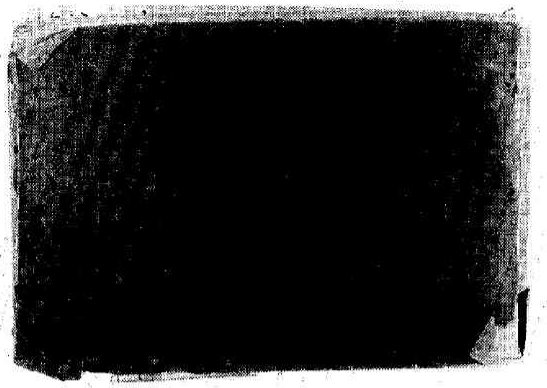
4、句点、読点や、◆○などの記号は、できるだけ原本に即したかたちとした。

5、改行は、できるだけ原本のかたちを生かしたが、文がひと続きの場合などは、適宜送り込んだ。

6、編集上の註記は【　】で示した。

7、人名など固有名詞以外の漢字は原則として常用漢字を使用した。





「日誌」の表紙（右）と第1ページ（左）
（神奈川大学日本常民文化研究所蔵）

（表紙）

「

日誌

昭和十年九月一日

袖山[1]　浜田[2]　高木[3]

」

昭和十年九月一日（雨）（日曜日）

○高木。

ノート[4]組見本、及村松家作物覚帳[5]図版原稿を見て頂く。ノートの組は　五十字二十行と決定、万作覚帳[6]は原本を探してみたが依然なし。大島[7]来り午後松やに[8]ゆき　かへって夜は偕楽園[9]に村上氏[10]送別会あり、再度かへって足半[11]写真編輯に従ふ、十一時ニ又帰る

◎はまだ

日曜日だったから、と言ふわけでもなかったが、之と言ふべき仕事をしなかったのを遺憾に思ふ　只、「文献

索隠[12]」（五十澤氏[13]指図）の発送準備と雑用やらで、今日を送る　今朝から文庫[14]内の掃除を袖山さんに代って受持つ事にした。（終り）

九月二日、雨、曇、（火）

○高木、

足半写真〈作〉編輯

◆はまだ

終日、書庫[15]に頑張って、カード書きと台帳への記入をなす（但シ本日ヨリ）　未だ馴れない故か、遅々として捗どらず、夜業までして僅か貳棚しか整理出来なかったのは、如何にも心細き次第？（終り）

九月三日　晴、曇、（水）

◆はまだ

一日中書庫＝カード書き丈ケ　夕方は、麻布商工学校へ行き編入試験を受けて来る、兎に角、バス（ママ）？…　夜「文献索隠」（五十澤氏指図）の発送準備を手伝ふ　就寝十二時過ぎ。

○高木、

足半写真編輯。

早川氏[16]「覚帳」地図原稿プロセス[17]に返す。訂正の部分有、五時帰る。

九月四日（曇）

○高木。

足半写真編輯了。

川崎[18]より有賀[19]来り、「村松家万作覚帳」初校全部渡す、表の校正共。洋服地を頂く、

○袖山

朝〈図書〉より正午近く迄図書整理[20]。後　マンスリ[21]原稿作成。午後お次[22]。

◆浜田。

午前中、神田の十字屋[23]行　教科書求めに

午後　書庫にてカード書き。

九月五日。（曇）

◆はまだ

午前午后、文庫にて高木氏指図のもとに、図書整理、
（但シタ刻　暫時、小川氏[24]のアシナカの整理手伝す
◎昨晩から学校へ通ふ　先生始め皆の方々に　心からなる感謝を捧げつゝ（終り）
○高木。
保谷村郷土資料[25]写真編輯。

九月六日。（曇）、
○高木、
「保谷」写真、及、「万作覚帳」附録写真、プロセスに渡す。見本出来、175頁（カ）と〈決〉仮定す。高橋氏[26]より原稿送還。
◆はまだ
終日文庫にて、カードより控帳への転記をなす。
（袖山）
午前中図書整理、
午後　お次

九月七日（晴）土曜、
連日の陰雨やうやく晴れたるが如し。
○高木、
高橋氏より写真補遺一葉送付サル。昨日浅川氏[27]より足半送付、今朝礼状出す、足半写真編輯更へ。
文庫にある織田文庫[28]を書庫に移して、張氏[29]の整理に託す、
◆はまだ
一日中書庫にてカード書き。

九月八日（晴）日曜日
◆浜田
書庫ーカード書き、
○高木、書庫の四六判本の拾捨をして頂く。

九、月九日（晴）月
◆浜田
例に依って例の如く、書庫に陣取って、カード整理　一日々々と努力の結果が酬ひられ、整理され行くは気持良し
◎雲を摑む様な英語の稽子が、漸く、興を覚える様に

なる、袖山大兄に感謝しつゝ（終り）

（袖山）午前お次

午後書庫

○高木、

足半写真プロセスに渡す、村上氏は十六日までに、と言へど、十六日までには出来ず、十八日といふ。（小川氏同道）保谷村校正着手、

九月十日（曇・雨）風強し　火曜日

◎はまだ

一日中書庫、なり

○保谷村校正、

小川氏足半写真ネーム作成。

村松家再校全部入手。

ノート、初校出初ム。

去る土曜日より先生を中心に民族学の対象〈提義〉についての論議頻りに行はる。

九月十一日、（曇＋雨）水

○保谷校正。

ノート2[30]、山口氏初校二台了。足半ネームプロセスに持参、小川氏同行。川崎より有賀来り、打合の結果、「村松家」の方は十四日ごろ迄に校了の約をす。ノート2号初校六十三頁にて了す。

○はまだ

書庫なり

九月十二日（曇）木曜

◎はまだ

書庫なり

◎高木、

「村松家」再校。

九月十三日（曇少雨）

村松家再校、

足半ネーム校正出、右残をプロセスに入れる。H、L、C[31]、八十斤、五連也。初一二〇斤とせしも、後八十斤に更む。

足半本文校正今日 ゟ(より)、

袖山兄逗子行き

◎ はまだ

・午前文庫にて、図書整理

・午後は市川氏の計算で算盤取りを手伝ふ

・夜、例に依り学校へ。授業なし、全校生徒

乃木神社参拝して帰る

今日は乃木大将殉死の日なればなり　終り

九月十四日、曇、後雨

○高木。

民友社[32]にノート二号凸版渡す。

「村松家」再校。

夜、土屋[33]、有賀氏[34]の名子制度研究の報告会[35]あり。夕方、

大島来る。

はまだ＝午前文庫、午後書庫、

九月一五日、曇、日曜

はまだ

一日中書庫

○高木、休み。歌集完成ス　ついて善正寺詣、

九月一六日　晴　月曜

はまだ、

一日中書庫　但シ、仕事ハ　午前ハ袖山さん二人で。大

島さんのやった仕事ノ再調をなし、書架　棚ノ整理。

午後、カード書（一人）

（袖山さんお次）

高木。

民友社にノート凸版原稿渡す。プロセス。足半の残を入

れた所　八〇斤では不可といふのをよくきいてみると

日野や[36]が信用がない事が分る。

九月十七日　雨。

これで先月あたりから一と月ばかり天気のいい時が少い。

高木。

「村松家」再校、泊り。

浜田

午前滝野川行き　夜具取りに
午後書庫（本綴り）

九月十八日　雨

浜田　一日中書庫　但シ、（本綴をなす）

九月一九日（木曜）　晴
　秋晴れの上天気
浜田、午前、市川さん[37]の計算　算盤入れを手伝ふ
午後　図書整理　レッテル貼り

九月二〇日　金曜　曇
　晴曇定めなき　秋の空は昨日の快晴に引返へ　今日は又暗雲低く垂れ下って。嫌味を与へる事、甚だし自然の変化の甚だしきに　比して変わらないのは。文庫始めアチック、諸氏の奮闘振りでは、なからうか。怠者の我輩、は、　只敬服あるのみ。
浜田＝一日中書庫　但シ、レッテル（登録済）貼り　今月中には、一階だげ（ママ）でも整理完結。するつもりで頑張って居るが。どうなるやら。
○高木。小川氏、宮本氏[38]と三省堂工場[39]に二赴ク。

九月廿一日　雨天、土
㊙　文庫図書整理、
浜田　一日中書庫
　レッテル貼り
女中部屋から、病人二人も出したと云ふので、台所は消毒開始、?……ために夕食は、外で　とる、
○高木。
足半初校々了。三省堂蒲田工場に小川氏と共に赴キ一とまづ完了ス。
夜、先生、土屋氏。磯貝[40]、宮本、小川氏等東北に赴カル[41]。上野へ見送り、大島ニ逢フ。泊り。

九月廿弐日　日曜日　雨
　今日も又雨
浜田　一日中、仕事せず　只管英語の練習
○高木、

ノート校正、

九月二十三日　月、曇、
○朝プロセスに足半刷見本とりにゆき、三省堂に渡す手筈を定む。
ノート再校。
張氏書庫中、織田文庫整理につき十進法に依る相談をなす。
中島[42]製本出来。更に渡す。
浜田
一日中書庫、カード書き。。

九月二十三日　月曜　雨
浜田、書庫、
小松さん[43]泊り

九月二十四日　火曜　大雨
浜田　書庫
秋季皇霊祭で誰も来ず

文庫は只、高木、小松、野澤[44]三兄位のものだった
夜、歌会[45]あり
書庫雨漏り甚しく、皆の心痛一方ならず

九月二五日　水、晴
久方振りに、天日を仰ぎ得た、
浜田、書庫、
○先生、東北方御帰京
○「村松家」校了。早くかへる。

九月二十六日
浜田＝書庫
○高木。曝書。奥様の御部やに絵巻類を干させて頂く。
午後四時頃方川崎にゆき村松家校了にす。

九月二十七日、晴、（金）
○ノート校了にす。曝書。昨日の如く奥様の御室に折本のものを干す。夜、高橋氏見ゆ。
浜田

午前　書庫
午後　文庫、図書の黴（カビ）を落す。

九月二八日　晴　（土曜）
浜田　一日中、文庫　図書の黴（カビ）を落す。

単式、四半倍判。
三百枚、

九月二九日　晴、日曜
浜田、文庫のガラス扉拭き
　夜、学校ノ短歌批評会へ参加す、
○高木
彙報[46]中、古文書ノ件ニツキ御相談す、
町田氏資料出版[47]ニツキ町田氏御来訪。

九月三〇日　晴　（月）
　浜田。終日　書庫
○高木、

古文書復刻ニツキ単式印刷[48]へ見学ニユク、
夜、松井君[49]来ル、単式ヨリ川崎知合ノオフセット印刷所に赴キシカバ　桑山[50]ニ松井君来訪アル由話スニ彼亦来ラントイフ、即チ連レ立チテ来ル、
製本、出来、（直シモノ）

十月一日　晴　火曜
浜田……今日も例に依って例の如く、書庫にて図書整理、
　夜、学校は休み、（市記念日）

十月二日　雨　水曜
浜田、
　終日書庫にて図書整理
　泊り（高木、五十澤両氏）　就寝二時
○高木、
朝プロセスに赴キ、保谷村校正刷十七枚位受取り、オフセット見積ヲキクニ　五十銭也トイフ。保谷村校正。
〈オフセ〉プロセス、足半用紙残一連余、民友社ニ廻シテノートの写真用ニ用ヒントス、

十月三日〈三日〉曇　木曜

浜田、…書庫

旧カードの整理を始める、（書架番号記入）

禧久兄来タル

○高木

「糸満調書」[51]川崎に渡ス、応接室に画冊用書架を具え、画冊類を収む、

十月四、

○高木

朝、下柳歯科に赴キ、ソレヨリ民友社ニ廻ル

民友社用件

○ノート刷部数確定、

○古文書復刻について校正係の事、甘利氏[52]は春藤氏[53]を推ス、

ソレヨリ中島ニ赴ク

中島用件

○ノート製本代、五折マデ二銭トス、タヾシ「カガリ」見返しツキ。

浜田＝書庫　昨日の如く旧カード整理

拾月五日　土、晴

浜田　一日中書庫

拾月六日　日曜　晴

浜田　午前　高木さんの指図で風俗画報[54]の号数再調をなす、（夕方テニス）

○高木。

午前中一寸仕事を見てから、桑山へ赴キ、齋藤[55]に赴ク、上る。杯アリ、伴ニ半折ナド書キ遊ブ。

拾月七日　月曜　晴

浜田、終日、アチックで市川氏の手伝ひ、（アチックノート二号ノ調べ）

岩倉さん[56]北陸ヨリ帰られる。

就寝一時半、

○高木、

今日より　夜松井君をたのんで習字を初む、

拾月八日　晴天　火曜

浜田　午前　書庫
　　午後　五十澤氏の文献索隠発送準備

拾月九日　晴天　水曜

浜田　午前　文庫　図書整理
　　午後　書庫、

本日よりアチックへ横内君[57]来る

拾月十日　晴天　木曜

浜田　午前文庫にて図書整理、
　　書庫の一階が略々整理済んで、気持良し、

午後は。立教史学科と野球試合[58]のため、同人一同全部出陣、

勝負十一対十一〈対〉引別け

十月十一日　曇雨　金曜

浜田、午前午後　文庫、

后三時より、昨日の選手たちの慰労会あり、

木川さん[59]より同人一同の写真が届いて、美男投票や、

アダナつけをして、洪笑・曝笑裡に会を終へる、

夕刻より夜に入り雨一しきり、

○高木。

ノート第四[60]初校出来。

三十二頁、

織田文庫は張氏が整理に当ってゐたが、略々完了したので、目録を作る事にする。

十月十二日、土曜　晴

高橋氏保谷村写真全部出来、

浜田、文庫にて図書整理、

下戸前さん[61]、アチックより退く、

十月十三日　日曜　晴

○高木、休み、

浜田、午前中を先生御机の後の棚の掃除に費す、

午後テニス
夜アチックで奄美民謡と盆踊りを御覧に入れる

十月一四日　月曜、晴
浜田、午前午後　文庫
↙糸満語彙写シ
○高木
保谷村再校、
習字休み、

十月十五日、火曜、くもり、
○保谷村再校了、
「喜〈鬼〉界島調査」[62]項目川崎に渡す、
オキ調査原稿[63]出来、百七十余枚トナリヌ、
浜田　午前午後　書庫
本日より張さんの手伝ひ

十月一六日　水曜　曇
浜田　午前　アチック押入掃除
午後　書庫張さん手伝ひ
白耳義人[64]来ル、〈マラン〉Mr. Maran[65]
保谷サクインカード、泊り、

十月一七日　木　雨
新嘗祭　目黒の禧久兄宅へ行き冬物を取って来る（浜田）

十月一八日　金曜　晴天
浜田　午前　書庫　張さんの手伝ひ
午後　書生さん達と一所（ママ）に書斎ノ大掃除
奥様ニ御目に掛る
鬼界調査要目初校出来、マンスリーについての相談会あり、

十月一九日　土曜　晴天
浜田　一日中母屋（食堂・ホール）の大掃除　田島さん[66]より月謝貰ふ　夕方アチックの運動会[67]あり　一等賞を受く
夜　市川さんは御国へ出立

中島帙の見本布を持ちて来る、
アチック、の称号書キ方の決定をなす、[68]
　アチック・ミューゼアム

出版届書
一、文書図書〈画〉の題号
　　〇〇〇（書名）
二、著作ノ種類　著述
三、著作者氏名及住所
四、原著作物、ナシ
五、著作所の名称及所在地
　　アチック
六、印刷所ノ名称及在所
　　――――
七、発行年月日
　　――――
八、予約、
右、発行致候間、出版法第三条ノ紀約ニ準拠し刷見本二部相添及届出候也

年　月　日
発行者、
著作権者
　幡野文夫
内務大属　――――　殿

十月弐拾日　快晴　日曜
浜田　学校の遠足日、朝七時出、夜七時　帰る
　高尾山登山
高木、
夜　岩倉氏と共に、採訪準備のため伊東や[69]に買物に赴ク、

十月弐拾壱日　快晴　月
浜田　一日中、母屋大掃除手伝（応接間と、正玄関）
高木、
・岩倉氏、鬼界出張準備をなす。
・川崎に糸満聞書、挿絵原稿渡す。岩倉氏用原稿用紙[70]たのむ。
・夜、習字の会。出席者は、小松、宮本、野澤、袖山、

小川。小生、
・支那の骨董やさんといふ方見え、珍しき品を見せて頂く、アチック一見され御帰は十二時、小生泊り。

拾月弐拾弐日　快晴　火
浜田、一日中、書庫、
　午後　張さんの手伝ひ、
　午前　書庫一階の大掃除をする
高木、岩倉氏荷物の世話、

拾月弐拾参日　快晴　水曜日
浜田　一日中書庫　張さんの手伝ひ
　夜は学校休み（靖国神社祭）
高木、夜、岩倉さんと又買物、
　当夜、先生金沢におたち[71]、

拾月二十四日　木曜　晴
高木、。立教史学部の十五名 アチック見学あり、夜、糸満調書と、保谷の世話
浜田、午前張さんの手伝ひ
　午後　佐々木君[72]が来たので、久振りに島言葉で語り合ふ
　夜岩倉さんお泊りだったので二人いろ〳〵語る

十月二五日　金曜　快晴
浜田　一日中書庫張さん手伝ひ
高木、
アチックに来た人。
　永井氏[73]と　　氏、外人にて玩具研究家あり、見学したいといふ。
　文部省内愛育会より二人。
　夜、採集目安改訂[74]のため集会、出席者は
　高橋、小川、藤木、磯貝、岩倉、櫻田、宮本、村上（清）、木川、他二、山本[75]、金子[76]。高木。
　略々、項目の設定細目の列挙を了る。之が草案は宮本、小川氏に託す。
　高橋氏に「保谷」の写真順序のため校正渡す。
泊り。

十月二六日　曇、小雨　土
浜田　終日、村上（俊順）[77]さんの手伝ひで、物置にある民俗雑誌の分類をなす、
〈○夜　櫻田　岩倉氏等と晩さん会をする〉
〈十月　二十七日、日曜、雨〉
〈○高木　アチックに見えたのは小川、〉
高木。アチック見学。クロニクルの記者と通約（ママ）の方一人。山口氏の紹介也。夜、櫻田、〈□井氏〉岩倉氏の送別をかねて晩餐会を催す。
十月二十七日、嵐　後晴
アチックに見えたのは小川、山本二氏。
糸満聞書、校了、
夜泊り。源氏、桐壺カード終了、
十月二八日　晴　月曜
浜田　一日中、文庫図書整理、
夜教練査閲あり
高木。
習字会あり、松井君に水谷家旧蔵魚譜[78]の題簽書いてもらふ。泊る。
十月二九日　晴　火曜
浜田　一日中文庫
先生早朝御帰り
十月三十日
浜田）一日中文庫、カード整理
（田　市川さん、早朝帰館
高木。
岩倉氏の出発準備を市川氏に引つぐ。
岩倉氏用原稿用紙、メモ出来てといく（ママ）。齋藤[79]、松田[80]、今井[81]、三氏来訪、齋藤氏に国文学者伝記集成渡す、
夜、大島来る、九時近く、岩倉、市川、村上氏、らと風呂に赴ク。今夜御同族会[82]あり。

十月三十一日
高木、
岩倉氏準備終了、ノート六[83]、刷上げ、刷見本出来、
浜田　カード整理、

十一月一日　熱田神宮遷座祭
浜田　十時頃まで、カード整理
其の後、先生の指図に依る、五色石[84]の原稿を制本(ママ)す。
高木。
○出版届、謄写版にす。
○源氏索引制理(ママ)浜田了。
○夜　大島来ル。テニス、磯貝、小川、宮本、岩倉、小松、五十澤。夜帝大の学生多数参看あり、同時に、目安の会議再開。

十一月二日　土曜、快晴
浜田　午前、カード整理
午後、書庫、日本十進分類表を写し始める、

十一月三日　日曜　快晴
浜田、午前六半起床
午前七時明治神宮へ行く、
全校生徒揃ふて参拝、
其後忽ちに、丸ノ内の商工奨励館へ行き（徒歩）、特許品の展覧会を見る、帰ったのは、午後二時　それから夜十時迄、十進分類の写書をなす、就寝二時、磯貝さんオ泊り。今日二食で俄慢した。

十一月四日　月曜日　曇
浜田、終日　文庫
十進分類法の写書をなす
高木。寒くなる。
保谷写真ネーム原稿作成。夜、習字。かへりに松井、五十澤と、支那そばをくって少し酒をのんだ。
岩倉氏の荷物は本日運送やに托(ママ)す。

十一月五日　火曜　曇夜雨

浜田　終日　文庫、
岩倉さんの指図で大島（各島村法）の写書をなす、
明日迄には終了のつもり
夜、十二時迄、袖山さんから英語教はる、試験近づきしため、

十一月六日
(袖山)　午前中図書整理。
高木、昨日から今日にかけて岩倉さんと三味線をつくる。
[浜田]　一日中、昨日の仕事、予定通り出来ず、

十一月七日　晴
隠岐―原稿、川崎に渡す。昨日より袖山氏
[浜田]　午前　南島誌[85]の写書。
午後　渋谷に居る大島の人のところ行き、蛇皮線を借りて来る、（川内氏）一面識もない人だったので骨が折れた

十一月八日　金曜　晴
浜田　南島誌写書
夜学校で英語の試験あり
高木。保谷索引完成。
夜、岩倉、張二氏の送別会あり、岩倉さん二人で大島唄を披露す

十一月九日　土曜、晴
高木、
内田武志氏[86]「静岡県方言誌[87]」彙報として出版の御話あり、内田氏と地図組版について御相談いたし組見本を民友社に注文即日出来
川崎にノート第三原稿渡す。
浜田　十進分類法ノ写書をなす　張さん今晩出立される

十一月十日　晴　日曜
浜田　午前中　文庫の掃除
午後　十進分類表写書
出勤者　祝[88]、高木、二氏だけ、

十一月十一日、月曜日、
高木、朝　岩倉氏を東京駅におくり、それより、宮城前へ、市川、木川両氏とゆき　更に植物園を一見してから帝大に赴き、人類学教室に石器、土器を見学、帰途、山本氏に会ふ。夜、習字。
本日洋服出来。新調祝へをする（!?）

ノート覚え。
1、民具問答集[89]、
2、内房北部[90]
3　隠岐[91]、
4　糸満[92]、
5　三津[93]、
6、岩倉氏[94]、

浜田　午前　文庫、
　十進分類表写完了
　午後、目黒へ鎮三男[95]氏訪問したが不在
　岩倉氏朝出立

十一、十二日　晴　火曜日

浜田　午前　此の間借りた蛇皮線を返しに行く
　午後　目黒へ、三男氏と面会に行く（不在）
　就寝十二時半

（貼紙）
「　岩倉市郎帯出書籍
5．125　徳之島[96]詳記
　　喜界島
5　344　南島雑話
　　〃　南島雑話補遺篇[97]
」
↓
12年3月返架

十一月十三日　水曜日　晴
浜田　村上さん（俊順氏）の指図に依り、物置きにある人類学雑誌[98]、包装整理をなす　因みに村上さんは昨夜、老母病のため、国許へ出立の由？……
起床　六時半

十一月八日の記事にある「岩倉、張二氏の送別会」時の写真（拵嘉一郎氏提供）
前列左より　山本二三丸、小松勝美、宮本馨太郎、野澤邦夫、市川信次
二列目左より　祝宮静、張甲特、澁澤敬三、木川半之丞、岩倉市郎、内田武志
後列左より　袖山富吉、村上清文、藤木喜久麿、村上俊順、五十澤二郎、山口和雄、伊豆川浅吉、小川徹、高木一夫、高橋文太郎、磯貝勇

就寝　一時
先生は今朝七時前で文庫へお出でになる
　自己の六時半起床の無意義でなかりしを思ふ

十一月十四日　木曜、晴
浜田、午前　五色石　二冊を製本す
　午後　テニス三時迄
　　本職怠まける
夜、十二時迄、オ次にて松田さん[99]より英語を教はる

十一月十五日、金曜、
プロセスにて内田氏方言分布図概算[100]をきく。
　地図を書く代、三十円、
　製版、原図、　十円
　　斜のあるもの、五円、
　刷代、二円
中島、製本代、
　帙、一円三十銭、
　クロース、のもの、五十銭

浜田
　午前　新入書籍ノ整理（之まで袖山さんがやって居た）
　午後　織田文庫ノカード書き
　　（予定所要日　七ケ日のつもり）

十一月一六日　土曜、晴　夜雨
浜田　一日中、新入書籍整理
先生に高木、市川両兄は、みとへ、櫻田さん[101]帰らる、

十一月一七日、日曜、雨又は曇
浜田、日曜だったのと、悪天気のためか、午前中誰も見えず
午前＝昨夜、宮本さんから依頼されて居た、「アシナカ雑誌[102]」の照合をなす、
午後、織田文庫のカード作成
　午後五時までやって、百弐拾枚也
夜は、学校のクラス会に出席
　帰りて松田さんより英語習ふ。

夜、先生に高木、市川両氏帰らる、

十一月一八日　月曜、晴天

浜田

午前　午後、文庫。織田文庫のカード作成＝作成数

三百枚

午後三時過ぎより五時近くまでテニス、今日始めて奥様の御相手をする　高木さん、袖山と、四人なり

高木、

保谷村写真ネーム張込み初め。

ノート三校正出初ム。

十一月一九日　火曜日　雨天

浜田、織田文庫のカード作成　作成数　百枚

少なかりし理由、午前十一時より午後三時過ぎまで　田舎の鎮三男氏来館のためなり

十一月二十日　水曜　曇天

浜田　終日　織田文庫カード作成

作成数　二百五十枚也

民友社ト武蔵屋[103]へ電話ヲ掛ケル

田島氏より訓戒を受ける

高木。

保谷村写真校了。

本文校了　五台

十一月二一日　木曜、晴

浜田　終日　文庫…カード作成

作成枚数　二百八十枚也

十一月二二日　金曜　晴

浜田

カード作成（織田文庫）

作成枚数、三百五十枚だったので、心持殊に良し

先生に、小川、宮本、磯貝、村上両氏は夜みとへ出立[104]

十一月二三日　土曜　晴

浜田

午前カード作成、
午後、私用で一色先生[106]を訪問す、
高木、保谷完成準備、紙を民友社へ十連、プロセスへ、
一連七十枚入レル。

十一月二四日　日曜　晴
午前、文庫の大掃除
午後、テニス、
夕方までやり続ける
久振りに銭湯へ行く
先生一行、夜七時頃みとよりお帰り

十一月二十五日、月曜、雨
保谷　概算
民友社　172⁻、　組、八十銭
刷、三、二〇
浜田　午後三時までカード書き　その後宮本さんの原稿を清書（アシナカ）
急を要するとの事だったので、学校より帰って十二時近くまでに漸く終る　就寝一時

十一月廿六日　火曜　晴天
(袖山)　カード整理、
図書整理、

高木、
箱代、二銭
プロセス、概算、
〈109，47〉?

民友社使用紙、
五連三百枚、残四、二〇
【計算メモ】

(浜田)
織田文庫ノカード作成
漸くにして終る
所要日数　八日間
作成総枚数　二、〇三三枚

十一月二十七日　水
足半写真編輯
彙報第五[106]定価2、50決定
浜田、図書整理

十一月二十八日　木　晴
朝、民友社ニ赴キ、奥附校了、中島使ヒ来合セ　彙報五ノ特製三冊注文ス
表紙入レ替ニナルヤモ不知
浜田
午前　古文書ノ赤紙ヲ貼ル（先生の指図）
午後　隠岐ノ原稿整理

十一月二九日　金曜日　晴
浜田、一日中図書整理
保谷村完成、夜、高橋氏、宮本、小松両氏と仁寿講堂へ山ノ会へ赴ク、

十一月三十日
風俗画報製本出来、一冊　不完全ナル物〈者〉返ス。
ノート三、再校、
夜、先生京都にお立ち
浜田＝カードを図書目録の控帳へ整理
夜先生は京都へ

十二月一日　日曜　曇　夜雨
文庫の硝子窓拭きを為す
小生休み（高木）

十二月二日　月曜日
先生　京都よりお帰り
〔浜田〕　午前　伊豆川さん[107]の謄写板版ス りを手伝ひす
午後、アチックの使で目黒ノ鎮氏ノ許へ手紙を届けて来る

十二月三日、火曜日
浜田、図書目録ノ整理（カードより）

齋藤君の許へ出産祝儀ニ赴ク　不在、出直して夜九時半ごろ再度訪問し十一時にかへる、

十二月四日
稍感冒におかされし気味ニテ咽ニ塗薬し、アスピリンをのみタリ。
ノート三、再校。
浜田　旧アチック[108]の柱に署名してある人々の人名の写書をなす、（市川さん指図）
夜客間で　鎮さんを迎へて[109]島の話を聞く　参加者、十島行の人々と漁業史関係ノ人々
　僕も帰校後、呼ばれて行く　記念写真を撮る

十二月五日　木曜　晴天
浜田＝形のある仕事せざりを憾む
　只、風俗画報ノ再調（袖山さんと）と伊豆川氏ノ製本、二冊なした
ノート二、再校、中島来り、彙報五について写真用紙横目なりしを注ゐされたり

十二月六日　金曜、晴
浜田
　午前　図書整理
　午後、織田文庫カードの仮名つけ

十二月七日　土曜　晴
浜田、
　五色石四冊の製本を為す（先生ノ指図）
市川さん郷里へ帰る、

十二月八日　晴　日曜
今日こそ全く何もせず自分の試験勉強
ノート三、校了、

十二月九日　月曜、晴
浜田　織田文庫カードのカナツケ
本日より二学期の本試験始る（九日より十四日迄）

十二月十日　火曜日
浜田、
一日中織田文庫カードの仮名つけ

十二月十一日　水曜
〈ノート三、予定〉
ノート、三[110]　オキ、見積、

組、	151.20
表紙前付	38.40
表紙	1.50
凸版代、	8.70
柱版	1.80
別刷凸版	1.20
製本、	6.—
用紙紋ラシャ、	2.00
本文、	36.00
アート、	1.20
	248.80

朝　土屋先生おいでになり　先生ト十時半ごろまでお話しあり、土屋先生の許にてなされた演習論文中秀れたるものは彙報として出版さるゝ旨御約束遊ばさる、先生御出勤後土や先生は文書御調べ。
有賀（川崎）来り　刷代について協定し、中扉、写真の如きものは民友社なみに定む、
ノート三、見積をなさしむ。後、先生、土屋先生なぞと彙報発売法について御話ありしを思ひて発売法、及広告法を五十澤と諮る、計ると雖も何ら結論に達せず。
一と先づ従来発行せしものゝ総金額を調査せんとしたるも巨細にきはめるのには一寸暇がかゝりさう〈由〉故中途概算にて止む、
○〈松〉村松家捜絵刷り上げんと思ふ、幸ひプロセスより足半後篇写真残り持ち来りたれば、一応再調を施す。
○足半後篇印刷用紙調べてみる、アチックに若干、プロセス二二頁丈ノもの六十枚あり、
○足半組見本再校出来、宮本氏と校了にス、
浜田
織田文庫カードの仮名つけ。
漸く終る。（不解のものは袖山さんに任かして）

今朝初めて霜を見る

十二月十二日　木曜　晴

浜田　本日より、（昨日迄に整理した）織田文庫カードを五十音順に分類し始める　田舎より鰹節（小包）届く。

内田氏方原稿着

十二月十三日　金、晴

浜田

昨日に引続き、カード分類をなす、明日迄には終了の予定なり

夜は、高橋、磯貝、金子、祝の両氏見えて、民具の目安について会あり　十二時近くまで

先生は九時過ぎに御帰邸

ノート三、索引、桜田、山田(田)両氏にて完成、

今夜、齋藤方に赴ク、移転ありやと思ひしに移転する事止めたりといふ、九時半帰る御かへり、家にて風呂に入る、

十二月十四日　土、晴

足半後篇校正、三十二頁出、

〃　写真ネーム校正出来、

同時に村松家地図返してもらふ、

午後伊豆川氏によつて土佐捕鯨史ノ講〈口〉演あり、

土屋先生、御出席、

夜、先生　赤倉へスキーに赴かる、（十時出発）

浜田　引続き織田文カードのアイウ順分類

二学期の本試験が終って、一安心す、

十二月十五日（日）

十二月十六日　月曜

浜田

織田文庫のカード整理

夜磯貝さん御泊り

習字あり。今年は本日にて止め、来春ハ十三日方とす

十二月一七日　火曜　曇、雨
浜田、図書整理ト、カード整理
先生　は赤倉より早朝御帰邸
市川さん
夕刻より雨になる、寒さも増す　雪になるらしく、皆の話なり。とても待たれてならない
磯貝さん御泊り、
足半校正四台了、夕方より小川、宮本氏見ゆ、十時ごろかへる、

十二月十八日　水曜
朝プロセスに足半写真の件にて赴キ、カヘリテ足半終二台ノ校正ニ従フ、宮本、小川氏見ユ、夜、高橋氏、来、
○内田武志方葉書有。
浜田　午前、織田カードの目録作成開始
午後、目黒行き
鎮さんのところへ写真を持って行く（不在）

十二月一九日　木曜　晴
浜田、
一日中、織田カード、目録作成をなす、（カードヨリ原稿用紙へ写書ナリ）
午後より夜にかけて頭痛激しきため、アスピリンを呑んで十時に寝た、

十二月二十日　金曜日、晴
（浜田）昨日に引続いて織田文庫目録作成
夜、学校で成績の発表あり

十二月二十一日　土曜、晴
浜田　一日中織田文庫目録作成
今日迄に漸く半分出来る（一千枚）
今日より休暇に入る（学校）
〈二十一日〉
〈十二月二十一日〉
足半校正ノ為メ蒲田の三省堂工場ニ赴ク、小川、宮本氏同道。プロセスニ寄ル。足半校正未完成ニツキ持チカヘル。

（新宿ニテ齋藤君ニ会フ）

十二月二十〈三〉二日　日曜　曇　夕方雨

島前採訪記[12]校了ノタメ川崎ニ赴ク。

「プロセス」ヨリ静岡県方言誌附図見ニ来ルト云ヒテ来ラズ、電話アリテ明朝トイフ。

足半校正、小川、宮本氏ニテ了。本日足半用紙二連半入レル。H・LC、八十キン

浜田　午前文庫ニテ雑用

午後ヨリ愛宕山に登ル　放送局ノ外観ヲ視テ、馬術デ名高イ、石段ヲ見テ、青松寺前ノ三勇士銅像見テ、雨ニ追ハレテ逃ゲテ帰ッテ来タ、

（就寝一時）

十二月二三日　月曜　晴

浜田

一日中織田文庫目録作成

磯貝さんオ泊リ

十二月二四日　火曜、晴

浜田　午前　織田目録作成

午後　図書整理

午過ぎ文献索隠ヲ三田局へ出す

足半校正ノため三省堂ノ工場ニ終日居ル、宮本小川両氏ト同じ、

十二月二五日、水、晴

浜田、一日中織田文庫目録作成　漸く完了す

大正天皇祭、

先生ハ終日文庫

朝、川崎・民友社ニ赴キ、一度アチックに来てかへる、

二〈三〉時頃

十二月二十六日　木曜

浜田　図書整理

十二月二七日　金曜、

浜田

午前苗俗ノ訳文ヲ製本ス
午後図書目録ヘノ転記

十二月二八日　土曜日　雨
浜田
図書目録ヘノ転記（カード）

十二月二九日　日曜　晴天
浜田
五色石二冊外七冊計九冊製本をなす
早川さんオ泊リ

十二月三十日　月曜日
高木さん、袖山さん、僕、三人で文庫の大掃除
夜アチックの大掃除を手伝ふ

十二月三十一日　火曜日
浜田
かず〳〵の思出を残して今年も今日を以て別れだ　思へば今夏八月以来、当文庫員の一人として働く事になった自分は過ぎし五ケ月間を顧みて其処に、なんら、形のある働きのなかりしを憾む
只すべては来年を期待して真剣味のある歳たらしめたいと思ふ。

註

(1) 袖山富吉。昭和六年から一三年まで書生として過ごす。[マンスリー]によれば、袖山は「図書部」で、祭魚洞文庫の蔵書の整理を中心に仕事をしている。住所は「澁澤邸内」とあり、書生として住み込んでいたことがわかる。

(2) 浜田國義。昭和一〇年八月一六日から「図書整理に従事」する[マンスリー]。奄美大島の出身で、[拵 1991]によれば、その後昭和一六年に早稲田大学政経専門部を卒業し、澁澤の紹介で台湾銀行に就職した。この日誌の時期は、入所したてで、麻布商工学校へ通っている。袖山と同じくアチックの書生として澁澤邸に住み込んでいた。

(3) 高木一夫。昭和一〇年一月から正式に出版を担当。当時出版された「アチックミューゼアム彙報」「アチックミューゼアムノート」などの編輯を担当し、戦後の一、二年頃まで一〇〇冊あまりを手がけた[高木 1972]。[拵 1991]によれば、歌人で、アチック内でも高木を始め袖山、同人の市川信次などで「梁塵歌会」が結成されている(註(45)参照)。また当時刊行されつつあった『文献索隠』の「一茶俳句集」を担当した[マンスリー]。

(4) アチックミューゼアムノート。アチックミューゼアム彙報とならぶアチックの刊行物シリーズ。最初に刊行されたのは第二・山口和雄著『明治前期を中心とせる内房北部の漁業と漁村経済[見聞記]』(上)で、刊行は昭和一〇年一〇月である。この昭和一〇年には、十一月に第四の櫻田勝徳著『糸満漁夫の聞書』と、第六の岩倉市郎著『喜界島生活誌調査要目』、一二月に第三の櫻田勝徳・山口和雄著『隠岐島前漁村採訪記』の、計四冊が相次いで刊行されている。

(5) アチックミューゼアム彙報(以下「彙報」と略記)第一として昭和一一年四月に刊行された『愛知県北設楽郡下津具村　村松家作物覚帳』。この時期、図版原稿を作成するなど刊行に向けて作業が進んでいた。本書は下津具村の村松家に伝えられ、「万作物覚帳」と名付けられた寛政一〇年から明治二九年にわたる畑作の作物播種・植え付けに関する記録である。早川孝太郎が昭和六年にその存在を知り、翻刻すると共に、「万帳」に記載された畑の名を現実の畑と対照させる等分析を加えた上で刊行された。

(6) 註(5)参照。

（7）大島久雄。澁澤家の書生。

（8）不明。

（9）澁澤家が利用した中華料理店［河岡 1979］。おそらく茅場町二丁目八二の「支那料理　階楽園」であると思われる。

（10）村上清文。早稲田大学国文科を卒業し、その後雑誌『民俗学』の編集委員となったが、昭和六年アチックの同人となり［宮本馨 1972］、三面調査に行くまでアチックの常勤であった（［マンスリー］所載の住所録には「澁澤邸内」とある）。アチックの民具研究の盛り上がりの中で共同研究の幹事役を務め［澁澤 1933］、『民具問答集』（アチックミューゼアムノート〈以下「ノート」と略記〉第一　昭和一二年）の刊行に特に力を注いだ。薩南十島など共同調査に参加したが、昭和九年暮から新潟県三面に派遣され、翌年八月まで滞在、民俗調査を実施し狩猟用具などの民具を持ち帰った。帰京後、昭和一〇年九月より日本青年館へ勤務するようになる。記事に見える「送別会」は、村上の日本青年館への勤務に伴うものであることがわかる。

（11）足半（あしなか）は鼻緒を結んだ形の短小な草履で、昭和一〇年頃から始まったアチックにおける最初の共同民具研究の試みで取り上げられた。この成果は、同年の一〇月一〇日に雑誌「民族学研究」第一巻第四号に「所謂足半（あしなか）について（予報1）」として発表された。記事の頃は、その原稿に伴う写真図版キャプションや校正などの追い込み時期であったと思われる。続いて（予報2）が翌一一年「民族学研究」第二巻第一号に掲載され、最終的には同五月、彙報第九として刊行された。

（12）昭和九年から同人の五十澤二郎を中心に始められた仕事で、「索隠」とは五十澤の造語で索引のことである［市川 1973］。文献選択の基準は不明であるが、世間胸算用、農具便利論、漁村維持法、人類学雑誌、北越雪譜など多岐にわたり、五万分の一地形図の地名索引も作成された。この事業に関わったのは高木一夫（一茶俳句集）、下戸前敏（日本書目索引）、小松勝美（塩鉄論）、山本二三丸（地方凡例録）などで、まとまったものから順次刊行していたようで、昭和一〇年九月の［マンスリー］に「文献索隠は、九月一日附を以て第六号を発行、既刊の分に残本の皆無となったものがあるので、此機会に合冊を刊行すべく準備を進めている」とある。

（13）五十澤二郎。昭和九年九月からアチック勤務となった市川信次と兼ねてから知り合いであった五十澤は、昭和八年頃に澁澤と会う機会が出来、澁澤はその席で索引の効用を熱心に説いたところ、五十澤も対坐しているうちにアチックでやらせてもら

えるなら文献索引の事業をやってみようと思ったという［櫻田 1979］。結局、五十澤は市川よりもはやく、昭和九年七月にアチック入りした。

(14) 祭魚洞文庫。祭魚洞は敬三の雅号で、［拾遺］の年譜・昭和四年の項に「此時分より祭魚洞なる号を用い始む。書物を購いて読まざるを獺（かわうそ）徒に魚を捕り岸に棄置く様を諷笑せる支那古句月夜獺祭魚に拠る。尚釣を好み徒らに殺生をするにも懸く」とある。本邸の西側に昭和九年の秋頃から建設が始まり年末に完成した建物が「祭魚洞文庫」で、これ以後アチックの活動は「アチック」と「文庫」の二つの建物を拠点に行われた。澁澤は昭和七年二月に療養のため伊豆内浦の三津に滞在中、のちに『豆州内浦漁民史料』の大冊となる史料群を発見する。翌八年七月から当時國學院教員であった祝宮静により「アチック」の二階でこれらの整理が始まった。一方当時、早川孝太郎によって「村松家作物覚帳」の分析、松江藩「木実方秘伝書」などの筆写も行われ始めており、ここに『内浦史料』の仕事が加わり古文書を扱うアチックの伝統が強く推し進められたことが、「文庫」建設の機運を高めたのだろうと、櫻田は推測している［櫻田 1979］。

(15) 本邸の東北側にあった四階建ての木造の建物。直接研究に関係のない図書がおかれていた。註(20)参照。

(16) 早川孝太郎。三河出身の画家で、雑誌『郷土研究』への寄稿をきっかけに柳田國男の知遇を得、民俗学の道に入る。大正一五年春、柳田の紹介で澁澤と出会い、その協力のもとに昭和五年『花祭』を著す。昭和二年からアチックの同人となりアチック初期の民具研究に大きな役割を果たす。昭和八年には九州大学農業経済研究室の助手となり、九州を精力的に歩き、昭和九年五月には澁澤が計画し実施された鹿児島十島の共同調査に参加した。昭和一〇年のこの時期は八月に岩手県荒沢村、九月に那覇へ赴いている。

(17) 東京プロセス社。東京芝区田村町にあった印刷会社で、アチックではこの時期、彙報の図版製版を発注していた。日誌から『村松家作物覚帳』『武蔵保谷村郷土資料』『所謂足半に就いて』の写真や地図の製版を担当していたことが確認できる。

(18) 合資会社川崎活版印刷所。東京市京橋区築地にあった。『村松家』の本文活版印刷を担当。

(19) 注(18)の川崎活版印刷所の担当者。

(20) 昭和一〇年七月の［マンスリー］には「図書部の報告によると六月中に文庫図書原簿に記載せられた冊数は五百三十五冊で、依然として水産関係の書が多数である。目下作成中の目録は文庫のみに収蔵せられたもので、これは文庫収蔵の図書が大体に

一まづ整理を了へたので、一目で見渡し得る様にと、高木、袖山、大島三氏によって謄写出版さるべく仕事を急がれている。これが終了すると三氏は書庫の方に移る手筈になっている。書庫が完了すれば書斎で、それで大体図書整理が終わるのである。」とある。当時、アチックの図書類は「文庫」、書庫、書斎に分散して置かれ、日誌記事の頃は、「文庫」の整理が終了し、書庫の蔵書整理が始まっている頃となる。［拵 1991］によれば「澁澤本邸の西側に軒を接して建てられた、膨大な図書が収蔵されている文庫（祭魚洞文庫）と呼ばれていた研究室と、その文庫の北側の、通称アチックとよばれていた二階建ての建物の二つの棟からなっていた。そのほか、本邸の東北側に、車庫と並んで、書庫と呼ばれていた四階建ての木造の建物があり、ここには直接研究に資する本はあまり多くなかったと思うが、文学全集やあらゆる分野の本がぎっしりと収蔵されていた」という。

(21) アチックマンスリー。昭和一〇年七月三〇日付けで第一号が発刊。昭和一四年五月の第四四号のあと、一年以上の空白の後、昭和一五年八月の「季刊アチック」No.1の発刊を最後に事実上の廃刊となっている。同人の動向や、当時アチック内で交わされていた議論なども盛り込まれ、当時のアチックの様子を知る貴重な史料となっている。

(22) 当時の澁澤邸には正面玄関、内玄関の二つの玄関があり、この二つの玄関の間の三つほどの畳の部屋のうち二部屋が、五、六名いる書生の勉強部屋兼寝室で、これを「お次」と呼んでいたという。お次の書生の仕事は、電話の受付、客の対応、取り次ぎ、屋敷の洋館部分の掃除などであった［拵 1991］。

(23) 書店と思われるが詳細不明。

(24) 小川徹。東京大学在学中からアチック入りし、集まりつつあった民具の整理などを行った。足半の共同研究においては、「標本資料の整理並に測定、足半の構造、結びの名称」を担当した。昭和一二年、日本民族学会附属民族学博物館（註(26)参照）の設立に伴い、高橋文太郎、磯貝勇、宮本馨太郎とともに学会附属民族学研究所の研究員として派遣された。

(25) 『武蔵保谷郷土資料』のこと。彙報第五として昭和一〇年一二月に刊行。高橋文太郎が自らの生まれた保谷村（現・東京都西東京市）の民俗をまとめた。

(26) 高橋文太郎。武蔵保谷村の資産家高橋家に生まれる。大学卒業後、父の事業（武蔵野鉄道重役）を継ぐとともに、柳田國男に師事。とくに「山と民俗」について調査・報告を発表し、アチックでは昭和九年の薩南十島調査から調査旅行にも参加した。

昭和一二年、澁澤と高橋により保谷村に八千坪の土地が、昭和九年に設立されていた日本民族学会に寄付され、学会附属研究所と博物館が設立された。アチックで収集されていた民具はここに移され、高橋も研究員となった。『保谷村郷土資料』のほか『秋田マタギ資料』（ノート第一二　昭和一二年）『輪樏』（ノート巻二四　昭和一七年）も刊行されている［宮本馨 1972］。

(27) 浅川富夫。『所謂足半について』に、長野県南安曇郡烏川村で足半を製作しアチックに寄贈した旨、載せられている。

(28) 織田完之旧蔵の文庫。アチックに収蔵され整理が進められていた。

(29) 張甲特。［マンスリー］第一号に「光海君六年から明治末期に至る五六一通の朝鮮古文書目録の、カードを作成完了せられた張甲特氏の努力も独自でなかなか大きい」とあり、朝鮮古文書の整理に当たっていたことが知られる。その後臨時に織田文庫の整理に当たったが、昭和一〇年一一月、アチックを離れた［マンスリー］。

(30) 山口和雄著『明治前期を中心とせる内房北部の漁業と漁村経済［見聞記］（上）』のこと。

(31) 紙の種類と思われるが詳細不明。

(32) 民友社印刷所。東京市京橋区銀座西にあった。

(33) 土屋喬雄。旧制二高、東京帝国大学経済学部以来の友人であり、澁澤がアチックに力を入れるようになってからは、相談役として若い研究者の指導や推薦をするなど協力した。昭和一一年、龍門社での『澁澤栄一伝記資料』編纂事業にあたっては、澁澤は当時東大助教授であった土屋に依頼する（編纂事業は昭和一八年に一応の結末がついたが、最終的な刊行の終了は昭和四六年で、全六八巻。）など、公私に亘り澁澤が最も信頼した友人のひとりであった。昭和五五年から財団法人日本常民文化研究所の理事長をつとめ、神奈川大学への移譲にあたって尽力した。

(34) 有賀喜左衛門。澁澤とは旧制二高で同級であり、アチックの集まりにも早くから出席していた。昭和九年に始まった岩手県石神村調査では、有賀をはじめ、土屋喬雄、今和次郎、早川孝太郎が参加し共同調査が実施された。有賀は「南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度」を著し、昭和一四年一二月、彙報第四二として刊行された。昭和四二年から亡くなる五四年まで財団法人日本常民文化研究所理事長をつとめた。

(35) ［マンスリー］によると「九月十四日　夜、土屋、有賀両先生の荒沢村調査報告会あり」とあり、［芳名簿］によれば出席者は澁澤、土屋、有賀のほか山本二三丸、村上清文、市川信次、藤木喜久麿、小松勝美、小川徹、磯貝勇、山口和雄、伊豆川浅

吉、高木一夫、五十澤二郎、宮本馨太郎、木川半之丞であり、この研究会は「例会」と称されている。

(36) 日野屋洋紙店。銀座二丁目にあった洋紙問屋。社長は永島裕三氏［拵氏 1999］。

(37) 市川信次。［櫻田 1979］によれば昭和七年七月に早川孝太郎の案内で澁澤に会い、昭和九年九月からアチックに入る。［芳名簿］の市川の名の初見は、昭和七年七月七日の例会で、その後昭和九年一〇月一四日の例会から再び名が見える。『民具問答集』の質問状や写真の整理を行った。郷里越後高田の瞽女の調査も行っている。

(38) 宮本馨太郎。すでにアチックに関わりのあった父・勢助に伴われ昭和三、四年頃から例会に出席しており、三河花祭や、昭和九年の薩南十島、壱岐などの採訪旅行へ参加している。その後昭和一〇年からは毎日アチックへ通うようになり、種々の調査旅行や、足半共同研究、『民具問答集』『民具調査蒐集要目』編纂などに携わった。昭和一二年、磯貝、高橋、小川氏らとともに学会附属民族学研究所の研究員としてアチックより派遣された。昭和一七年、(財)日本民族学協会が成立すると協会調査部主任兼博物館主任として、戦中～戦後の混乱の中、蒐集民具を守り、昭和二七年民族学博物館の開館に尽力した［宮本馨 1968］。

(39) 東京蒲田出雲町にあった三省堂蒲田工場。アチックで『ノート』などの印刷を発注した。

(40) 磯貝勇。［芳名簿］によれば昭和一〇年四月の集まりからその名がみえ、翌一一年四月から正式にアチック同人となる。足半共同研究では足半の製作工程について分担し、［マンスリー］誌上に「民具の属名」「民具と星の呼称」を載せるなど、アチックの民具研究を担った一人であった。保谷の学会附属民族学博物館に研究員として派遣された。

(41) この旅は岩手県岩泉へ行ったもので、澁澤のほか土屋喬雄、宮本馨太郎、小川徹、磯貝勇のメンバーで、当時岩手県史編纂主任の森嘉兵衛の案内により史料を閲覧している［旅譜］［マンスリー］。

(42) 製本屋であるが詳細不明。

(43) 小松勝美。昭和一〇年二月、金子總平に替わり入所。豆州内浦史料の整理、編纂に従事する。一一年四月台湾研究のため予察旅行などを行うが、同年七月より病気のため休暇、秋には復帰し、内浦史料第一巻発刊をみて昭和一二年四月から再び療養に入る。［マンスリー］には自己紹介として「明治四四年東京生れ。（略）東洋史専攻、従来漢代の文化に興味を寄せていたが、或る動機から此奴が揺いで来たので思案中」とある。

(44) 野澤邦夫。昭和一〇年三月入所。祝宮静の助手として祭魚洞文庫において内浦史料の整理、編纂に従事する。〔マンスリー〕によれば、運動部長ということで「アチック庭球トーナメント」などを催している。

(45) アチック内で行われていた「梁塵歌会」のこと。〔マンスリー〕に「難しい批評や議論なぞは姑くおいて月に一度みつちり歌を作らうといふのが梁塵歌会の主旨とでもいふのでありませうか」とある。日誌の記事に関しては〔マンスリー〕に次のようにある。「暫く休んでゐた歌会を九月二十四日の夜アチックで開催。この日嵐めいた風雨の激しい夜であつたが出席は案外に多数であつた事は愉快な事の一つである。定連で缺席したのは五十澤で、出席したかの如くでさうでなかつたのは小松君である。山本君には詠草二首あれど残念乍ら此処に掲載すると叱られさうなので止めるより致方ない。村上（清文）も亦句を打ち案じる事稍久しかつたやうであるが終りまでには完成を見ずにしまつた。と僕は観察したが、案外打ち案じてゐたのは他の事であつたかもわからない」。主催していたのは歌人でもあった高木一夫。

(46) アチックミューゼアム彙報。ノートとならぶアチックの刊行物シリーズのひとつ。最初の刊行は昭和九年、竹内利美編の『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌』（彙報第二）であるが、第一は昭和一一年の早川孝太郎校註『愛知県北設楽郡下津具村　村松家作物覚帳』である。

(47) 町田氏は町田良一のこと。〔マンスリー〕によれば同氏の「御馬寄村古記録」は彙報として数冊、刊行の予定になっていたが、結局刊行されていない。

(48) 印刷所と思われるが詳細不明。

(49) 不明。

(50) 不明。

(51) 昭和一〇年一一月に刊行された櫻田勝徳著『糸満漁夫の聞書――隠岐調査報告2』（ノート四）のこと。

(52) 甘利氏　甘利武雄。民友社印刷所の社員（社長カ）。

(53) 不明。

(54) 明治二二年から大正五年にかけて刊行された月刊の風俗雑誌。江戸時代風俗考証、地方風俗の紹介などを内容とし、図版が多用された。東陽堂が出版元。

(55) 不明。

(56) 岩倉市郎。昭和一〇年七月、アチックに入る。同年八月の隠岐調査へ参加、九月一日に越後へ赴き、帰京したのが日誌の記載である。本来病弱であったため、一一月には『喜界島生活誌調査要目』（ノート第六）を刊行するものの、療養を兼ねて故郷の喜界島へ向かい、約一年間調査を行った。昭和一二年五月再度上京し、一六年にかけて（『薩州山川ばい船聞書』（ノート第一六　昭和一三年）、『喜界島代官記』（彙報第四一　昭和一四年）、『喜界島阿伝村立帳』（彙報第四四　昭和一五年）、『喜界島漁業民俗』（彙報第五五　昭和一六年）、『喜界島年中行事』（彙報第六〇　昭和一八年）を刊行した。この間もたびたび入院、療養のための帰郷、上京を繰り返し、昭和一八年澁澤らに見守られながら死去した。享年三九歳。

(57) 横内正直。長野県出身で昭和一〇年一〇月九日にアチックに書生として入ったが、翌年三月中旬に「お次」へ移った「マンスリー」。

(58) 昭和一〇年一〇月発行の「マンスリー」四号に、「運動部より」として「東京巨人軍に一泡ふかせる積りで作られたのではないが、綱町十番地にその覇を称へる全アチック軍は近日中に全柏竈軍と相まみえる事になった。尚これと前後して立教大学史学科軍との対戦が予定されている」とある。

(59) 木川半之丞。「高木 1972」によれば、アチックの刊行物で使用した民具、文書、絵画等の写真撮影を担当した。岡茂雄の斡旋でアチックに関わるようになったが、もとは東大人類学教室で写真撮影に従事していたという。

(60) 『糸満漁夫の聞書』のこと（註(51)参照）。

(61) 下戸前敏。「マンスリー」第五号に「又、かねて人類学雑誌、東洋学芸雑誌の総目録作成に好意的助力を寄せられてゐた下戸前敏君は此程その完了を見、再び父君の畢生の大事業たる雑誌索引の事業に専念携られる事となつた」とある。

(62) 註(56)参照。

(63) 昭和一〇年一二月に刊行される櫻田勝徳・山口和雄共著『隠岐島前漁村探訪記』（ノート第三）の原稿のこと。

(64) ベルギー人。

(65) 「マンスリー」によれば、一〇月一四日に「林文一、設楽啓治、E・Gマラン（ベルジック）、比嘉春潮、中垣虎次郎」が来訪したとあるが、日誌と日付が異なる。

(66) 田島昌次。当時の澁澤家の執事。[拾遺]の深川時代の書生を撮った写真にも写っている。
(67) 年代は異なるが、[拾遺]に運動会の写真がある。
(68) それまでアチックミウゼアム、アティックなどと表記がまちまちであったものを「アチック　ミューゼアム」とする事が決まった。[マンスリー]にも「尚従来不統一であったAttic Museumの仮名書はアチック・ミューゼアムと為すことに決定した」とある。
(69) 銀座三丁目に現在もある文房具商。アチックでは文房具はこの伊東屋で調達していた[拵1999]。
(70) 岩倉は昭和一〇年一一月から喜界島調査を開始する（註(56)参照）が、それにあたって『喜界島生活調査要目』を作成した。その「前書」によれば、岩倉はこの『要目』を喜界島の調査協力者に配布し、当事者の直接の記録を本に纏める心づもりがあったようで、「記録の仕方について」で十項目の記録方法の注意、お願いなどを述べているが、その一つに「原稿用紙はこちらから差し上げます」とあり、おそらく日誌記事の原稿用紙はこの為のものであったであろう。[拵1995]も、岩倉のこの一年間の調査にあたってはアチックから調査費用はもちろん、必要に応じて原稿用紙、鉛筆、消しゴムなどの必需品が送られてきた、と述べている。
(71) [旅譜]によれば一〇月二三日に出発し、黒部、氷見、金沢を巡り、二九日に帰京している。アチックからは市川が同道している[マンスリー]。
(72) 不明。
(73) 不明。
(74) [マンスリー]に「先生と市川さんとは御旅行中で缺席されたがアチックに金曜の集りが行はれた。先生のお話で、既に残り尠くなつて居る蒐集目安を多少増補訂することになつたからである。集る者は高橋文太郎氏以下約十人、高木さんに進行係りをお願ひして大體の骨組を決定した」とある。「採集目安」とは昭和五年に刊行された『蒐集物目安』のことで、大著『花祭』を出版した年に早川孝太郎を中心に作られた。[宮本馨1972]によれば、早川の愛知県北設楽郡の山村調査をきっかけとして、アチックの郷土玩具から生活・生産用具の収集・研究へと大転換があり、全国的な収集・調査が企図され、その中で『蒐集物目安』が作成されたという。これによりアチックの蒐集民具は増加し、『民具図彙』の編纂が意図されたが、その解説

資料の不足から、収蔵民具について名称・採集・製作・由来などの事項について寄贈者・使用者に質問し回答を求める作業が行われた。その体験からこの記事に見られるように『蒐集物目安』の改訂と調査項目の作成が進められ、昭和一二年に『民具蒐集調査要目』が刊行された。ちなみに、昭和五年段階ではまだ民具という言葉は用いられておらず、［有賀1972］によれば、澁澤は「蒐集物」のほか「民俗品」という言葉も使っていたが、昭和九年から一〇年にかけての時期に「民具」という言葉を創作し使い始めたという。

(75) 山本二三丸。当時、東京大学経済学部在学中。アチックの例会には昭和一〇年四月一六日から出席している。また［マンスリー］第五号（昭和一〇年一一月）に「民具に就いて」の文を寄せている。

(76) 金子總平。祝宮静により開始された内浦史料整理の助手として、昭和八年秋頃からアチック入りする。昭和一〇年頃から例会に参加するようになり、また勤務先（高輪学園）の休日を利用して南会津地方の熊狩り調査も開始している。これは昭和一二年一二月にノート第一三『南会津北魚沼地方に於ける熊狩雑記』として結実している。また、昭和一四年刊の『星家所蔵種子帳稲刈帳』（彙報第三八）、「越後栃尾俣温泉文書」（『社会経済史料雑纂第三輯』彙報第六二所収）は金子が発見し、翻刻に至ったものである。戦時中、同人鹿野忠雄氏とボルネオに渡り熊の調査に当たっていたがそのまま消息不明になっている［櫻田・荒井］。

(77) 村上俊順。昭和一〇年五月、アチックに入所、文献索隠の事業のうち地名索引を担当、また同年一一月に澁澤が理事の一人となり成立した日本民族学会は、翌年から事務所がアチック内に移転し、一二年一〇月に保谷に移るまであったが［振興会1984］、村上は学会機関誌『民族学研究』の発刊当初（昭和一〇年一月）から昭和一一年九月まで事務を担当した［古野1970］［マンスリー］。昭和一三年秋にアチックをやめ、東京世田谷区太子堂に村上書店を開業した。詩人として数冊の詩集を出している［渋沢史料館］。

(78) 詳細不明。

(79) 齋藤勇［マンスリー］。詳細不明。

(80) 松田常彦［マンスリー］。詳細不明。

(81) 今井繁三郎［マンスリー］。詳細不明。

(82) 澁澤栄一が明治二四年に作った家法により規定された「澁澤家同族」は、栄一が創立に関与した多数の会社の株を保有し、一族は家法により決められた配分金を受けた。月に一回、同族会の集まりが開かれていた。

(83) 『喜界島生活誌調査要目』のこと。

(84) 織田完之の編になる書。正編・続編全五九冊。アチックで書写し製本に出していたものと思われる。現在、流通経済大学図書館蔵。

(85) 詳細不明。

(86) すでに『鹿角方言集』を公にしていた内田は、移転先の静岡県の方言調査を昭和六年から着手し独自に調査を進めていたが、静岡県葵文庫長からの紹介で澁澤と出会う。澁澤は血友病で歩行も容易でなかった内田の綿密な仕事に驚嘆し、アチックから『静岡県方言誌』全三冊を刊行した。その後病状も進み秋田に疎開したが、その地で菅江真澄研究会をつくり、菅江真澄研究に没頭した。

(87) 内田武志の著作『静岡県方言誌　分布調査』で、昭和一一年一〇月に「第一輯動植物篇（彙報第六）」、一二年二月に「第二輯童幼語篇（彙報第一四）」「第三輯民具篇（彙報第二五）」として刊行された。

(88) 祝宮静。昭和七年、澁澤が療養のために滞在していた伊豆において、大川太郎左衛門家が所蔵する大量の古文書に出会い、文書の東京大学経済学部への寄贈と史料集の刊行が進められた。翌昭和八年、アチックにおいて本格的に整理が開始され、大川家近隣の古文書も含めた『豆州内浦漁民史料』全四巻として刊行された。この仕事を中心的に推進したのが、当時國學院大学講師の祝であった。他に昭和一二年八月に『近江国野洲川簗漁業史資料』（彙報第一八）も刊行している。

(89) 意図されていた『民具図彙』は中絶したが（註(74)参照）、これに代わり刊行されることとなった。昭和八年一二月から一〇年一月にかけて、各民具それぞれにふさわしい質問を設定して、寄贈者ないし使用者に対し質問状を発送し回答を得る、というかたちで纏められた。村上清文が主に担当し、昭和一二年五月にノート第一として刊行された。

(90) 山口和雄の『明治前期を中心とせる内房北部の漁業と漁村経済』のこと。ノート第二として、上が昭和一〇年、下が昭和一一年三月に刊行された。

(91) 註(63)参照

(92) 註(51)参照

(93) 山口・櫻田共著の『美保関・広島三津・伊予大三島　漁村探訪記』（ノート第五）のこと。昭和一一年一月刊行。

(94) 註(56)参照

(95) 奄美大島の人。

(96) 発行者、刊行年不明。久野謙次郎が大蔵省より派遣された際の報告書である「徳之島誌」と、編著者等不明の教育史を中心にした「喜界島誌」からなる。

(97) 南島雑話、南島雑話補遺編ともに、薩摩藩士名越左源太時敏が残した民俗誌。幕末に滞在し見聞した様子を絵と共に詳細に記録したもの。昭和八年に永井竜一により復刻された。

(98) 明治一七年に坪井正五郎らが発起人となった会合がもととなった日本人類学会の機関誌。『人類学会報告』『東京人類学報告』などを経て明治四四年から『人類学雑誌』となる。日本人の起源論、形質、考古などに関する論文が掲載されたが、昭和四年に『民俗学』、昭和一〇年に『日本民族学』が刊行されると次第に自然人類学、考古学の分野が多くなった。

(99) 澁澤家の書生、松田巌。

(100) 編集を担当していた高木は、のちにアチックの出版に関し、図表、写真などが豊富な、贅沢なものであったことを述べ、「今でも覚えているのは内田武志氏の『静岡県方言誌』の分布図で、あの表は随分高価な表であった。然も枚数が相当に多かった」と述懐している［高木 1972］。

(101) 櫻田勝徳。昭和一〇年五月にアチックへはいる。すでに『漁村民俗誌』を纏めており、祭魚洞文庫を新設し本格化し始めたアチックの漁業史研究を担った。昭和一〇年一一月に『糸満漁夫の聞書』（ノート第四）、一二月に山口和雄と共に『隠岐島前漁村探訪記』（ノート第三）、翌年一月には同じく山口と『美保関・広島三津・伊予大三島　漁村探訪記』（ノート第五）などを著した。戦後、財団法人日本常民文化研究所の理事長を務めた。日誌の記事は一〇月二七日に岐阜県への調査から帰ったことを指す［マンスリー］。

(102) 雑誌「あしなか」は昭和一四年の創刊であり、この項詳細不明。

(103) 詳細不明

(104) 「旅譜」によれば「アシナカ研究会」として伊豆三津の松濤館へ宿泊したことがわかる。「マンスリー」にも「アシナカ研究も、去る十一月二十三日の、三津会議に於ける「摘要」大綱の決定を最後として、漸く終りを告げるに至つた。」とあり、澁澤のほか小川、宮本、磯貝、村上が参加したことが日誌に記されているが、「マンスリー」からは高橋文太郎も参加したことが知られる。

(105) 不明。

(106) 『武蔵保谷郷土資料』のこと。

(107) 伊豆川浅吉。昭和一〇年六月よりアチックへ参加する。昭和一一年に刊行された『土佐鰹漁業聞書』(ノート第一一)、『土佐捕鯨史』上・下(昭和一八年刊 彙報第五三、五四)、昭和三三年に刊行された『日本鰹漁業史』上・下(常民文化研究第八五、八六)を著すとともに、『宇和島藩吉田藩漁村経済史料』『同補遺』(昭和一三年刊、彙報第二六、二七)、『土佐室戸浮津組捕鯨史料』(昭和一四年刊、彙報第三六)の編纂にあたった。

(108) もともと大正一〇年、澁澤が鈴木醇ら友人達と標本などを集めたところから始まったアチックは、邸内物置の屋根裏であった。その後、車庫の屋根裏を経て、昭和八年、二階建ての陳列館兼研究所が建設された「櫻田」。

(109) 「芳名簿」によれば「鹿児島県大島郡宇検 鎮氏来訪」として「鎮三男 澁澤敬三 山本二三丸 高橋文太郎 村上清文 伊豆川浅吉 宮本馨太郎 市川信次 小松勝美 木川半之丞 小川徹 浜田國義」が参加したことがわかる。

(110) 『隠岐島前漁村探訪記』のこと。

(111) 詳細不明。

(112) 『隠岐島前漁村探訪記』のこと。

＊引用文献

[有賀 1972] 有賀喜左衛門「日本常民生活資料叢書総序」『日本常民生活資料叢書』第一巻(三一書房)

[市川 1973] 市川信次「昭和十年頃のアチックミューゼアム」『日本常民生活資料叢書』月報17

[内田 1973] 内田ハチ「アチックのころ」『日本常民生活資料叢書』月報23

［河岡 1979］ 河岡武春「敬三の人間形成」『澁澤敬三』上（澁澤敬三伝記編纂刊行会）
［拵 1995］ 拵嘉一郎「岩倉市郎氏喜界島民俗調査のこと」神奈川大学日本常民文化研究所論集『歴史と民俗』一二
［拵 1991］ 拵嘉一郎「澁澤先生の思い出」『歴史と民俗』七
［拵 1999］ 拵嘉一郎「私とアチックミューゼアム」『歴史と民俗』一五
［櫻田 1979］「敬三とアチックミューゼアム」『澁澤敬三』上（澁澤敬三伝記編纂刊行会）
［櫻田・荒井］ 櫻田勝徳・荒井貢次郎「第一一巻関東・北陸篇（1）解説」『日本常民生活資料叢書』第十一巻（三一書房）
［澁澤 1933］ 澁澤敬三「アチックの成長」『祭魚洞雑録』、のち『澁澤敬三著作集』第一巻所収。
［渋沢史料館］「特別展図録 屋根裏の博物館」（渋沢史料館 一九八八）
［拾遺］『柏葉拾遺』昭和三一年（柏窓会）
［振興会 1984］『財団法人民族学振興会五十年の歩み』（財団法人民族学振興会）
［杉本 1981］ 杉本行雄『澁澤先生に仕えて』私家版
［高木 1972］「アチックの出版」『日本常民生活資料叢書』月報1
［古野 1970］「古野清人氏談話」『澁澤敬三』上
［芳名簿］「アチック来訪者芳名簿」渋沢史料館蔵。本稿では伊藤広之氏が昭和六二年に校訂したものによった。
［マンスリー］『アチックマンスリー』第一号〜第四四号、季刊アチックNo.1
［宮本馨 1968］ 宮本馨太郎「民俗博物館建設への歩み」『民俗博物館論考』（慶友社）
［宮本馨 1972］ 宮本馨太郎「第一巻民具篇解説」『日本常民生活資料叢書』第一巻（三一書房）
［宮本常 1973］「農業経営史研究の先達」『早川孝太郎全集』第七巻（未来社）
［旅譜］『柏葉拾遺』所収、のち『犬歩当棒録』第三部、『澁澤敬三著作集』第四巻に収録

＊参考文献

『澁澤敬三』澁澤敬三伝記編纂刊行会
『澁澤敬三』宮本常一（日本民俗文化体系3）講談社
『昭和前期日本商工地図集成』柏書房
『南島文献解題』成城大学民俗学研究所
『日本常民生活資料叢書』第一巻～第二四巻　三一書房
『日本民俗大辞典』吉川弘文館
『日本歴史大辞典』吉川弘文館
『流通経済大学所蔵祭魚洞文庫目録』流通経済大学